

『説文解字繫傳』汪啓淑本の底本推定のための版本比較ツール

鈴木 俊哉 (広島大学 総合科学部)

こんにち、徐鍇の『説文解字繫傳』(いわゆる小徐本説文解字)の研究においては祁寯藻本(1839),あるいは述古堂本(成立年不明,四部叢刊影印により世に出た)が定本となっているが,清代の説文学で広く用いられていたのはこれらではなく汪啓淑本(1782)である。汪啓淑本は四庫全書の稿本に由来するとの定説があるが,実際に比較すると多数の差異が見え,参照関係が疑わしいとの指摘がある。これを検証するための版本比較ツールを作成した。

Design of the Tool to Compare Wang Qishu version of Shuowen Jiezi Xizhuan with Other versions.

suzuki toshiya (Faculty of Integrated Arts and Science, Hiroshima University)

In modern studies of “Shuowen Jiezi Xizhuan” (SWJZ-XZ), the versions by Qi Junzao (祁寯藻) and Shugutan (述古堂) are regarded to be the standard references. But when Shuowen was most actively studied in Qing dynasty, the most widely used version of SWJZ-XZ was the version by Wang Qishu (汪啓淑), so it is important to have a tool to compare them, to understand precisely about the Shuowen studies in those days. The WQS version has been told to be derived from the draft manuscripts for Siku Quanshu (4KQS), but there is an observation that WQS and 4KQS versions are quite different. To confirm the observation, a comparison tool is being developed and prepared to be published.

1. はじめに

『説文解字』[1][2](以下,説文)は後漢初期の許慎が編んだ,概要がわかるものの中では最古の漢字字書である。もともとは壁中書などを正確に理解するための古文字学を背景とすると考えられている。しかし,千字文のような小学書と異なり,広く世に行われていない時期もしばしばあり,許慎原本の説文がそのまま継続的に流通してきたわけではない。全体が伝わる最古の版は北宋初期に徐鉉(大徐)が勅命により校訂した,いわゆる大徐本説文解字(986)まで下る。

説文に表された部首や六書の考え方は広く受容され,様々な字書に影響を与えた。しかし,説文部首の排列規則,また,部首内の文字の排列規則は説文の中では説明されていないこともあり,理解が困難だったと思われる。漢字をその発音で並べる韻書の排列が一般化すると,南宋の『説文解字五音韻譜』(以下,五音韻譜)のように韻書の順序で再排列したものが広まり,もとの大徐本も世に行われなくなった。

現代の説文学は,明末清初の汲古閣の毛扆(1640~1713)が大徐本説文解字を翻刻したことから再開した流れと言えよう。この汲古閣本説文解字(1713)[3]は北宋本に基づくとして広まったけれども,実際には徐鉉の弟の徐鍇(小徐)による『説文解字繫傳』(以下,小徐本)から見出し字を追加するなどの改変が加わっている。このことは段玉裁の『汲古閣説文訂』(1797)に至って明ら

かにされた。汲古閣本以降・説文訂以前に執筆された多くの説文研究は,五音韻譜との差異に注目するあまり,汲古閣本こそが北宋本の様子を伝えるものだという前提で書かれていることが多い。紀昀による四庫提要は実際の宋刊本を見ずに書かれたと思われるが¹,朱筠(1729~1781)²や桂馥(1737~1805)³,翁方綱(1733~1818)⁴のように,実際の宋刊本を見たり,さらには汲古閣の印記がある宋刊本を見た研究者でさえも,通行の汲古閣本より脱落が多いから坊本である,と考えた研究者が少なくなかった⁵。

清代の小徐本の刊行は印刷は汲古閣本よりかなり遅く,1782年の汪啓淑によるもの[4]が最初である。現代の説文学において,小徐本の定本の役割は祁寯藻本(1839)[5]や,述古堂本(書写年は不明⁶,四部叢刊による影印出版は1919年)[6],あるいは趙宦光・鉄琴銅劍楼旧蔵の南宋残本⁷に移っている。しかし,清代の説文学が急激に展開した時代に刷本として見ることができた小徐本は汪啓淑本とその翻刻(龍威秘書本(1794)など⁸)だけであったから,当時の説文学の議論を理解するには祁寯藻本だけを確認しても不十分である。

たとえば段玉裁『汲古閣説文訂』(1797),『説文解字注』(1807),桂馥『説文義證』(~1805),嚴可均『説文校議』(1806),鈕樹玉『段氏説文注訂』(1823),王筠『説文韻譜校』(1835)などは祁寯藻本以前であるし,王筠『説文句讀』(1850)のように祁寯藻本を見てもそれ以前の小徐本資料との違いのために採用しない場合すらある。

本稿では、この汪啓淑本の書誌学的な研究のためのツールについて述べるが、まず、次章でその背景となる小徐本に関する書誌学的な問題を整理する。

2. 小徐本各本の書誌学的問題

本稿で設計するツールの主要な目的は汪啓淑本と四庫全書本の比較だが、ツールに組み込む関係上、その他の版本についても若干整理しておく。

2.1. 汲古閣説文解字の書誌学的問題と小徐本

前章で触れたように、汲古閣本説文解字は、最後の修訂⁹において小徐本を用いて改変され、これが通行本となった。最後の大規模な修訂が加わる前に少数刷られたものは未改本・初印本などと呼ばれ、現在では淮南書局による翻刻本^[7]がよく参照される(この経緯に関しては高橋由利子氏の一連の研究^{[8][9][10]}に詳しい)。

汲古閣は小徐本の翻刻はしていないけれども、毛辰が所持していた小徐本を見た記録は様々な文献に見える。たとえば汲古閣毛氏蔵書目録^[11]には説文解字繫傳 40 巻が見え、同時代の張氏澤存堂の宋本玉篇(1704)^[12]の序文にも、底本となる宋本玉篇を汲古閣から借りたことに加え、校訂資料として集韻や小徐本も借りたことが書かれている。汲古閣旧蔵の小徐本は後に段玉裁・鈕樹玉・顧廣圻など様々な研究者の校訂研究で参照された。

この本は現在伝わらず、その由来は明らかにし難い。董婧宸氏は、毛辰による『九經字樣』跋文に錢焯(述古堂の錢曾の孫)から資料を借りたことが書かれていることから、述古堂本または後述の錢楚殷本から書写された可能性に言及している^[13]¹⁰。ただし、顧廣圻や周錫瓚が本部に脱落があったことを記録している一方、述古堂本にはこれに対応する脱落がないため、仮に参照関係があったとしても完全な写本ではなかったことになる。

2.2. 汪啓淑本の書誌学的問題

本稿の主目的である汪啓淑本は、その跋に「聖朝文治光昭館開四庫，淑得與諸賢士大夫游獲見繫傳稿本。愛而欲廣其傳因合舊鈔數本校録付梓，其相沿傳寫既久無善本可稽，不敢以臆改也。」とあり、一般的には、四庫全書本と底本を同じくすると考えられている¹¹。実際、四庫全書本・汪啓淑本・述古堂本・祁雋藻本の収字数を比較すると、

祁雋藻本: 10724 字

述古堂本: 10691 字

汪啓淑本: 10394 字

四庫全書本(文淵閣本): 10369 字

のようになり、述古堂本と汪啓淑本の収字数にはかなりの開きがあることがわかる。そのため、祁雋藻本と述古堂本、汪啓淑本と四庫全書本という2つの系統があるように見える。しかし、小篆字形を比較してみると、図 1 に示すように、四庫全

書本は「魚」が全て大徐が言うところの「史籀字形」にデザインされており、かなり違った印象を与える¹²。

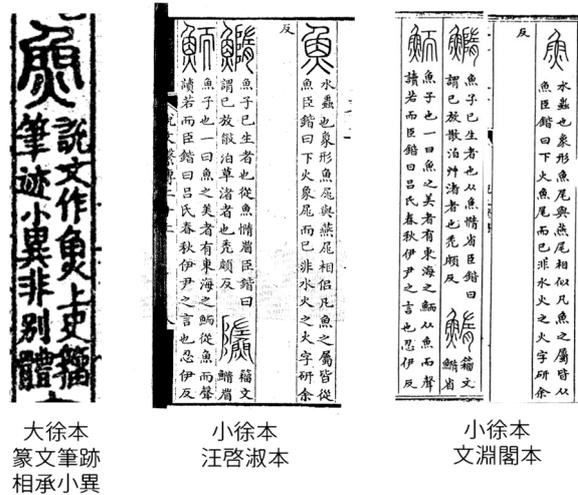


図 1: 汪啓淑本と四庫全書本の「魚」

近年、董氏は汪啓淑の跋文について新たな解釈を提案した。「四庫全書本の稿本を獲た」と読むのは誤りで、「諸賢士大夫から稿本を獲た」と読むべきだとするのである^[13]¹³。この説は非常に興味深く、董氏は汪啓淑本・翁方綱校本¹⁴などとの比較で一定の検証をしているが、四庫全書本との対比はされていない。四庫全書は政治的な背景からの改変があり、通常テキスト分析の対象とはされないため¹⁵、董氏も分析を避けたと思われる。

汪啓淑本に対する別の批判として、先行する二徐の対比研究であるところの朱文藻『説文繫傳考異』(1770)^[15]¹⁶や大徐本によって本文を改めているというものがある¹⁷。これは朱文藻自身が『重刊説文繫傳考異』の後序に「考異原稟一冊復取毛刻説文互勘見余舊所録譌字汪刻皆已改正間有存者而因仍大誤之處不少」と書くことから来していると思われる。『繫傳考異』は、朱文藻が様々な文献から収集した徐錯の事跡のリストを附録として持つ。汪啓淑本は『繫傳考異』に全く触れていないが、その附録においてこのリストを複製していることから、参照していたことは明らかである。また、述古堂本・祁雋藻本では小徐の案語や反切の形式から見て実際に小徐本に由来すると思われる箇所が、汪啓淑本では大徐本から引いたものになっている事例や、祁雋藻本・述古堂本の小篆は大徐本と異なるのに、汪啓淑本では大徐本字形になっている事例があるのも事実である。

しかし、跋の「不敢以臆改也」を信ずるとすれば、汪啓淑が加工したのではなく、底本が既に大徐本から引いていた可能性も否定できない。汪啓淑本の大徐本的要素を汪氏に帰すべきかは議論の余地があるだろう。実際、図 2 に示すように、汪啓淑本が他の小徐本と異なる場合、四庫全書本も異なる場合がしばしば見えるのである。

| | | 毛5 | 四 | 汪 | 述 | 祁 |
|---|----------------------------------|----|---|---|---|---|
| 兀 | 毛5:帯01上_02b.g00 祁:帯01.05a.g00 | | | | | |
| 礼 | 毛5:帯01上_02b.g03 祁:帯01.05a.g03 | | | | | |
| 神 | 毛5:帯01上_02b.g17 祁:帯01.05b.g07 | | | | | |
| 夬 | 毛5:帯01上_03a.g05 祁:帯01.06a.g05 | | | | | |
| 騶 | 毛5:帯01上_04b.g04 祁:帯01.08a.g01 | | | | | |

図 2: 汪啓淑本に大徐本からの影響が疑われる例
本稿の版本比較ツールより抽出。左から、汲古閣通行本、四庫全書本、汪啓淑本、述古堂本、祁寯藻本の小篆を示す。述古堂本と祁寯藻本は共通であるのに、汪啓淑本はむしろ大徐本に近い。しかし、四庫全書本もまた大徐本に近い場合がある。

2.3. 祁寯藻本の書誌学の問題

董氏の研究[13]に基づき、祁寯藻本の底本についても述べておこう。まず、よく知られることとして、祁寯藻本の序文に、顧廣圻の写本をもとにしており、巻 31 以降は趙宦光旧蔵の南宋刊本に由来することが書かれている。この顧廣圻写本は現在伝わらないが¹⁸、董氏は、様々な校本から顧廣圻が当時参照できた資料を調べ、底本の候補の母集団を議論した。

- 趙宦光・鉄琴銅劍楼旧蔵の南宋刊残本
「顧千里經眼記」の印が見える。
- 顧之達・黄丕烈所蔵の汲古閣旧蔵写本
2.1 節で述べた通り、現在伝わらない。顧廣圻が校した汪啓淑本には汲古閣旧蔵本と比較したことが書かれており、汪啓淑本は汲古閣旧蔵本よりも脱誤が多いと書かれていたという[14]。
- 黄丕烈所蔵の錢楚殷写本
現在伝わらない。祁寯藻本編纂の際に確認された顧廣圻写本には、錢楚殷写本によって補った部分があると識語があったという¹⁹。錢楚殷は述古堂本の錢曾の長子であることから、述古堂本と錢楚殷本には参照関係が推測される²⁰が、述古堂本は心部の後半から忝部冒頭まで脱落しているのに対し、錢楚殷本にはその脱落が無かったとされており、参照関係があるとしても単純な複製ではない。

この3種を母集団とすれば、「錢楚殷本により補った」とのことであるから、顧廣圻写本の骨格は汲古閣旧蔵写本と考えるのが妥当であろう。汲古閣旧蔵写本の由来について2.1 節で述べたように、述古堂本と関係している可能性があり、また2.2 節で見たように収字数の観点からも述古堂本との近縁関係が推測される。しかし、祁寯藻本に

しか見えない部分は、錢楚殷本までしか辿ることができず、どの資料から由来するのかは未解決である。

2.3.1. 祁寯藻本と鉄琴銅劍楼本について

今日の我々の観点からすれば、これらの資料のうちもっとも古く貴重なのは鉄琴銅劍楼本であり、顧廣圻写本もこれを底本の一つとしているから、祁寯藻本の巻 31~40 は鉄琴銅劍楼本をできるだけ忠実に翻刻するように思われる。しかし、実際にはそうっておらず、図 3 に示すように、他本では全てレイアウトが共通しているものを祁寯藻本では変更している場合がある。

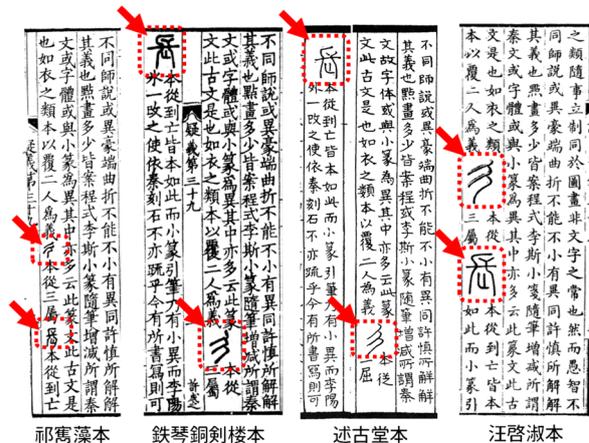


図 3: 祁寯藻本のレイアウト変更例

さらに、このようなレイアウト変更だけではなく、底本ではおそらく違いが見えなかったものを校訂の際に描き分けたと思われるものもある。これと同様のものが四庫全書にも見られる場合がある。次節で具体的な例を示す。

2.4. 祁寯藻本と四庫全書本の類似について

表 1 は、巻 39 疑義篇に見られる「説文字体」と「小篆」の比較、および関連する字形(巻 31,33,36)について各本の状況に違いがあるものを採集した表である(この対比問題に関しては福田哲之氏の研究[16][17]が詳しい。また、疑義篇全体の位置づけと理解については坂内千里氏の研究[19][20][21]が詳しい)。

ここでいう説文字体とは、小徐が李陽冰校訂以前の説文にあったと推定する字形、小篆とは李陽冰刊訂本²¹や秦石刻文に見える字形で、言・康・彳・月(肉)にて、大きく示されているものが説文字体、小さく示されているのが小篆である。混乱を避けるため、後者を以下では石刻篆文と呼ぶ。疑義篇には、小徐が説文字体と石刻篆文の違いを示すために挙げたものが幾つかあるが、小徐本は全ての字形を説文字体で書くわけではなく、石刻篆文の字形のまま書いているものも少なくない。

そのため、伝写の過程でどのような字形差を意図したのかという理解が混乱した可能性がある。

表 1: 禰寓藻本と鉄琴銅劍楼本の小篆字形差

| | 禰寓藻本 | 鉄琴銅劍楼本 | 述古堂本 | 汪啓淑本 | 四庫全書本 |
|---------------------|------|--------|------|------|-------|
| 卷 39 疑義篇 「彳」 | | | | | |
| 卷 33 通論篇 「行」 | | | | | |
| 卷 39 疑義篇 「言」 | | | | | |
| 卷 39 疑義篇 「庚」 | | | | | |
| 卷 36 怯妄編 「庚」 | | | | | |
| 卷 39 疑義篇 月(肉) | | | | | |
| 卷 31 部敘篇 肉 | | | | | |
| 卷 31 部敘篇 月 | | | | | |

たとえば、「彳」は図 3 に示すように「本從三属」と説明され、文字学的に正しい説文字体は 3 画で書くべきだという立場を取る。石刻篆文に関しては説明がないが、禰寓藻本・鉄琴銅劍楼本・四庫全書本の書き分けは共通して第 2~3 画を連続させて書いているため、これが意図した字形差と推定される²²。しかし、述古堂本・汪啓淑本はこの書き分けを失っており、述古堂本はどちらも石刻篆文、汪啓淑本はどちらも説文字体で書いている。

「彳」を書き分けている鉄琴銅劍楼本・四庫全書本も、通論篇の「行」では石刻篆文になってしまっており、文字学的な理解と書き分けが十分連携していたのかには疑問がある。禰寓藻本の「行」が説文字体に倣うのは、底本に由来するのではなく、校訂の結果の可能性があるが、禰寓藻本の附録の校勘記ではこれらについて言及は無い²³。

同様に「言」も禰寓藻本が校訂で改変したことが疑われる。小徐は、「言」は「辛」と「口」を組み合わせたものであるから、「辛」の横画を曲げないのと同じように、「言」も横画を曲げない形が文字学的に正しい本来の説文字体だとする²⁴。しかし、禰寓藻本と四庫全書本以外はこの字形差

の書き分けを失っている。断定はできないが、四庫全書本と禰寓藻本に直接の参照関係がないとすれば、底本では区別がなかったものを校訂の際に書き分けたことが疑われる。

以上は、字形差に関して何等かの説明が記されている例だが、そのような説明が見えない「康」や「月(肉)」はさらに書き分けが難しい。

「康」は、禰寓藻本では、本来「米」に書くべきところを、小篆では「氷」に作る字形差と捉えている。一方、鉄琴銅劍楼本では、①縦画が無いこと、②左右の「又」が連続すること、③「米」ではなく「氷」に作ること、の 3 つの違いがある。①については、説文古籀補、續金文編などで確認しても縦画を欠く金石資料が見当たらないことから、意図したものではなく、版木の破損などが疑われる。②については、怯妄編の「庚」で字形差に説明があり、鉄琴銅劍楼本の「康」は「庚」の説文字体と整合している。しかし、禰寓藻本は「庚」は説文字体であっても、「康」はそれに倣わず、③しか書き分けていない。四庫全書本は②③とも書き分けているけれども、「庚」は解説と整合していないという問題がある。

最後に示した月(あるいは肉)は、さらに難しい状態である。本文には書き分けに関する情報が何も無い上、部敘篇と比較しても、これが月なのか肉なのかすら判然としない状態である²⁵。禰寓藻本は「月」の右下の部分にカーブを追加しているが、他本には似たような傾向は見えない。一方、四庫全書本は「肉」のようにデザインしようとしたと思われるが、やはり他本にそのような傾向は見えない。鉄琴銅劍楼本と汪啓淑本の部敘篇における「肉」は、楷書の「肉」のようにデザインしようとしたことが窺えるが、必ずしも全ての箇所ですべてのようになっていくわけではなく、小徐本の古形を残すのかは疑わしい。

「言」のように、禰寓藻本と四庫全書本のみ共通する事例はあるが、前節までに見たように、四庫全書本と禰寓藻本には直接の参照関係を伺わせる事跡はなく、また、旧説では間接的な参照がある筈の汪啓淑本にも共有されていない。このことから、汪啓淑本の底本については再検討する意味があるだろう。

3. 汪啓淑本・四庫全書本比較ツールの構成

さて、本来であれば、全ての見出し字について四庫全書本『繫傳』、汪啓淑本、また禰寓藻本の説解の比較をするべきだが、優先順序として①見出し字の有無が異なるもの、②見出し字小篆に字形差があるもの、によって絞り込むこととした。この作業に用いるツールについて検討する。

3.1. 先行事例

小徐本を含む説文のデータベース化(以下、DB)の先行事例としては、坂内らによって行われたものがあるが[22]、これは禰寓藻本を対象とし、そ

ここで引かれる他の文献を追跡することを目的としたDBであって、小徐本それ自体の版本比較を目的とするものではない。

版本比較が可能なDBとしては、蔣門馬による説文解字総合検索システムがある[23]。小徐本としては祁寯藻本と述古堂本を含むが、本稿で問題とする汪啓淑本や四庫全書本は含まない。また、見出し字から掲出頁を探る部分のDB化はできているが、おそらく祁寯藻本と述古堂本の見出し字全てを対比しておらず、図4のように述古堂本では実際には脱落している文字も含むかのような結果を示す²⁶。このため、見出し字の有無を確認する作業は書影画像を目視で確認せねばならない(特に、検索は正文と重文をまとめた単位で行うので、重文の出入りは全く検出できない問題がある)。また、所収字に関するデータが改善されたとしても、書影画像を直接並べて比較することができず、「どの版本とどの版本の小篆字形が近いか」は確認し難い(国学大師にも同様のものがあるが、収める版本数は蔣門馬のシステムよりも少なく、書影画像を並べて比較することができない問題も同様である)。

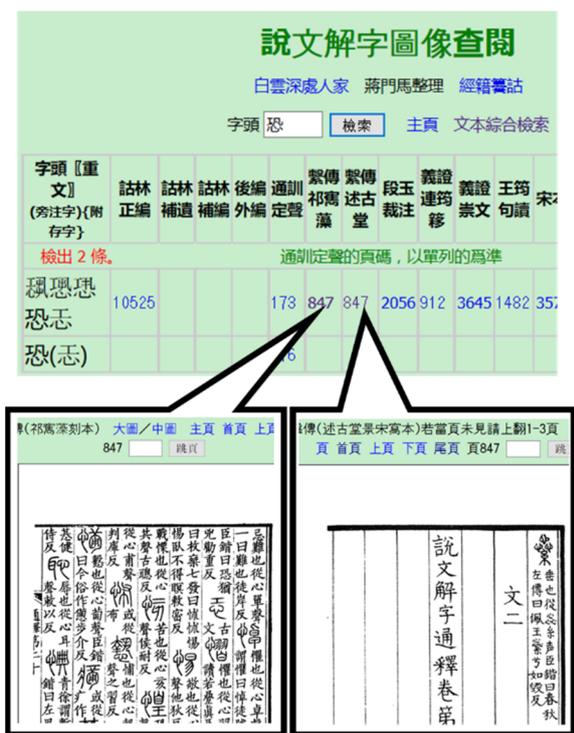


図4: 説文解字総合検索システムのインターフェース

3.2. 本稿での作成するDBの機能

上述のように、既存のDBは所収字の集合の端的な比較や、書影画像を対比させるというインターフェースを持つものが無く、仮にそれらのDBに汪啓淑本と四庫全書本のデータを追加したとしても、それをを用いて小篆字形に関して版本評価を行う作業コストは大きいと思われる。

またもう一つの問題として、索引の延長線上にあるため、研究者がDBで検索した結果についてのレビューを書き込むというインターフェースは持たない点がある。説文の見出し字は11000字規模なので、レビュー作業は中断・再開を繰り返すことになるが、これらのDBから画像を引用して大量のコメントを書き、その整合性を保つ²⁷ことは容易でない。そのため、レビューコメント自体もDB化ができるようなインターフェースが期待される。

本稿では小篆字形の一覧性とレビューコメントの書き出しについて重視し、全ての小篆字形を並べた対照表を作り、小篆の字形差だけは追加の操作なしに確認できるようにした。そこから、それぞれの説解が確認できる画像へリンクを貼った形式とする。また、確認結果についてコメントの記録と、その書き出し・取り込みができるようにする。表中の項目は基本的には祁寯藻本の見出し番号で定め、祁寯藻本に対応づかないものだけ別プレフィックスの番号を振ることとした。

大量の画像を貼った表をクロスプラットフォームかつオフライン作業できるよう、表そのものはHTMLで作成し、画像はJavaScriptのlazy load方式で表示するようにした。また、コメントの書き出し・取り込みについてもJavaScriptにより、項目番号に対するテキストの連想配列データをJSON形式で扱うものとした。また、小篆に字形差がある項を簡易に記録するため、タップまたはクリックによって項目をマークできるようにした。

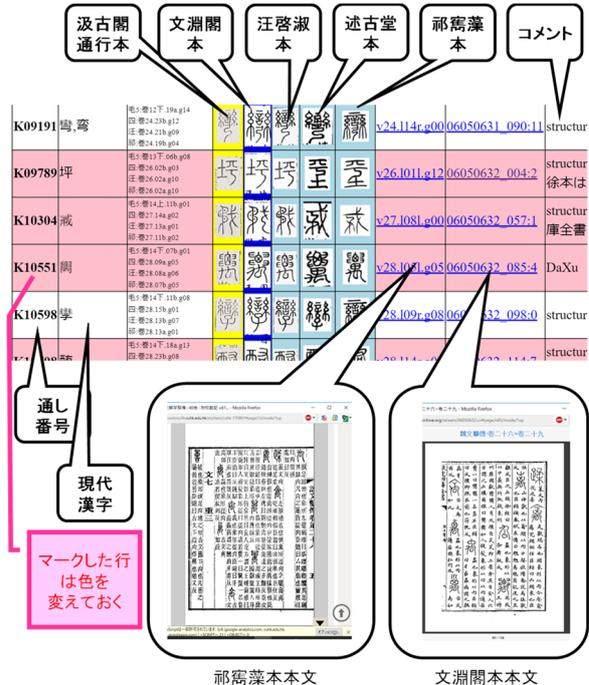


図5: 本稿で設計した比較ツールのインターフェース

HTML表の生成をJavaScriptにより動的に生成することも検討したが、現時点では小徐本1巻あ

たり 500 行規模の行を動的に生成する必要があり、初期化の際の DOM 操作の負荷が解決できなかった。そのため、HTML 表そのものは固定的に生成することとした。小篆画像を版本ごとに別ディレクトリに置き、このディレクトリに表中に配する順序で画像ファイル名を列挙したファイルを置き、表生成のスク립トはこれに従って表を作成する。画像ファイル名を列挙したリストは、単純に連結して CSV ファイルとし、表計算ソフトウェアでも編集可能なので、脱落字や対応順序の違いへの対応は表計算ソフトウェアで加工した。このツール群は公開済みである[24]。

コメントの整合性確認は、現時点ではレビューコメントに種別のプレフィクス(点画の増減、部品の増減、部品の交代、部品の位置関係変更、など)を付加し、特定のプレフィクスを持つコメントがついたエントリのみ表示させることで見直せるようにした。

3.3. データベースに組み込む書影画像の検討

資料の選定にあたっては、最終的にオープンアクセスの形で公開できることを目指した。書籍として公開されたものから小篆見出し字だけを採集した場合、字数で考えると全体の 1 割以下なので、表全体を著作物として公開する場合には引用の範囲と見ることは可能であろうが、個別の文字画像を再利用可能な形で公開することや、本文書影の公開には十分注意が必要と思われる。

四庫全書本『繫傳』は浙江大学附属図書館による文淵閣本スキャンデータが Internet Archive(以下 IA)に寄贈されており、これを用いることとした[25]。IA は様々な形式でのデータを提供しているが、まず PDF 形式のデータから 2 値画像データを抽出し、小篆の箇所を手作業で切り出した。この切り出し画像もツールと同じ git リポジトリで公開している。現時点ではオフライン画像として組み込んでいるが原画像に対する切り出し位置は全て記録しており、IA 自体の IIIF 機能による参照への移行を検討中である。

これと対比するデータとして、まず、小徐本研究の定本であるところの祁寯藻本を組み込む。ただし本稿執筆時点では、祁寯藻本の原刻または影印の書影画像を再利用可能なライセンスで公開しているところがない。そこで、見出し字は影印本[26]から切り出した画像を用いているが、本文は香港中文大学が公開している小學彙函叢書の中での翻刻本の画像[27]へのハイパーリンクとした。香港中文大学では IA と同じオンラインリーダーで公開しており、各ページへのリンクを直接張ることができる。小學彙函本のレイアウトは祁寯藻の原刻本とは異なるので、原刻本の小篆の切り出し箇所から小學彙函本の対応箇所は別途対応表を作成した。現在、原刻本の書影の撮影について検討中である。

汪啓淑本に関しては、東北大所蔵本[4]のマイクロフィルムの紙焼きから見出し字を切り出したものを組み込んだ。切り出した見出し字に関しては対応表としての公開許可は得ており、見出し字画像単体での公開を交渉中である。また、国立公文書館所蔵本のデジタルスキャンによる書影画像の公開も準備している。

3.4. 汲古閣大徐本と四庫全書について

前述のように、四庫全書は意図的な改変や、誤写などが疑われ、通常の漢籍のようなテキスト分析の対象からは除外されることが多い。本ツールによる比較の事前検討として、同じツールにより四庫全書の書写の品質の確認を行った。具体的には、四庫全書薈要本(IA 公開データ[28])と汲古閣通行本(京大所蔵[3])の比較を行った。詳細な分析結果は投稿中[31]でありそちらに譲るが、220 個の字形差が見つかったものの、その殆どは微細な点画の変更で、四庫全書で筆写された小篆の大半は底本から大きくは外れていないと考えられる。

汪啓淑本が大徐本により校訂した可能性についても検討するため、この大徐本の小篆画像も表に組み込んだ。表および小篆画像については既に公開しているけれども[29]、本稿執筆中に、京大守岡氏により汲古閣初印本・通行本とも IIIF による公開が開始された[30]。今後は画像参照をそちらに切り替えることを検討したい。

4. 現時点での成果

ツールによるレビューの結果から既にいくつかの知見が得られている。以下の 2 点より、図 2 から想起される「四庫全書本の編纂において大徐本によって改められ、その影響が汪啓淑本に及んだ」といった単純な図式ではないことがわかる。

- 一般論として、大徐本と小徐本の小篆を比較すると、構成部品は共通でもその配置が異なる例がしばしばある(往々にして説解では構造を決定できない)。文淵閣本の小篆が通行の小徐本と異なり、汲古閣本に符合する例は 60 字程度しか見つからないが、汲古閣本と小徐本が符合しているのに文淵閣本が異なるものが 270 字以上見つかっており、少なくとも、文淵閣本は大徐本によって大きく改めたとは言いがたい。
- 文淵閣本の小篆が小徐本と異なり汲古閣本と符合する 60 字程度のうち、同じ箇所でも汪啓淑本も汲古閣本に符合しているのは半数程度しかない。ただし、それらの項は重文であることが多く、説解が短いため、何等かの大徐本の影響なのか、底本となった小徐本のままなのかは判断が困難である。

小篆のみの比較については投稿中[31]であるが、その他に「文淵閣本も汪啓淑本も説解が同様に誤

るが、小篆字形は文淵閣本のみ誤る」例も見つかっている。今後、『説文解字篆韻譜』²⁸掲出字形も含めて拡充を図りたい。

謝辞

本稿は科研費課題番号16K004600Aの補助を受けました。本稿の調査は東ヶ崎祐一先生にご教示いただいた知見から始まっています。近年の説文の書誌学的研究の動向について白石将人先生、大西克也先生に様々なご教示を頂きました。

参考文献

- [1] 許慎:『説文解字』, 四部叢刊所収, 上海涵芬樓借日本岩崎氏靜嘉堂藏北宋刊本影印, 商務印書館 (1919).
- [2] 許慎:『説文解字』, 中華再造善本, 中国国家図書館宋刻元修本影印, 北京図書館出版社 (2004-03), ISBN 7501322627.
- [3] 許慎:『北宋校刊説文真本』 (1713, 汲古閣説文解字), <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A020menu.html> (2018年10月閲覧)
- [4] 徐鍇:『説文解字繫傳』, 新安汪氏藏板(1782, 汪啓淑本), 東北大学附属図書館 教養 821-99, また国立公文書館 内閣文庫 漢 13408 経 46-15.
- [5] 徐鍇:『説文解字繫傳』, 中華書局 (2017.5), ISBN 9787101125474.
- [6] 徐鍇:『説文解字繫傳』, 四部叢刊所収, 上海涵芬樓借烏程張氏藏述古堂景宋写本, 商務印書館 (1919).
- [7] 許慎:『説文真本』, 淮南書局據汲古閣第四次様本重刊 (1881), <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A024menu.html> (2018年10月閲覧)
- [8] 高橋由利子:「段玉裁の『汲古閣説文訂』について」, 中国文化, 研究と教育, 漢文学学会報, 55, p.37-52 (1997)
- [9] 高橋由利子:「『説文解字』毛氏汲古閣本について」, 汲古, 27, p.27-38 (1995-06).
- [10] 高橋由利子:「官版『説文解字』の依拠した版本について」, お茶の水女子大学中国文学会報, 17, p.155-171 (1998-04).
- [11] 味經書屋:『汲古閣毛氏藏書目録』, 台湾国立故宮博物院, 平圖 010715-010716. 日本では旧所蔵だった北平図書館時代のマイクロフィルムの複製が国会図書館(国立国会図書館書誌 ID 027978025)で閲覧可能である.
- [12] 陳彭年:『大廣益會玉篇』, 張士俊澤存堂, <https://www.digital.archives.go.jp/das/image-j/>

- M2015090415363910551 (2018年10月閲覧)
- [13] 董婧宸:「傳抄, 借閱与刊刻: 清代《説文解字》的流傳与刊刻考」, 北京師範大学 博士后研究報告, 2017-07.
- [14] 王獻唐:「説文繫傳三家校語抉録」, 山東省立図書館, 季刊第1集, 第1期, 校勘 p.1-70, (1931) <https://doi.org/10.11501/1121940>
- [15] 汪憲:「説文解字繫傳考異」, 四庫全書, <https://archive.org/details/06050634.cn-07050635.cn>
- [16] 福田哲之:「唐写本『説文解字』口部断簡論考」, 書学書道史研究, 13, p.43-53 (2003).
- [17] 福田哲之:「『篆隸萬象名義』に見える「齋」字の篆体について:『説文解字』日本簡窺」, 国語教育論叢, 21, p.105-117 (2012-03-31).
- [18] 周祖謨:「唐本説文與説文舊音」, 『問学集』所収, 中華書局 (1966-01), 下巻, p.723-727.
- [19] 坂内千里:「『説文解字繫傳』, 「疑義篇」考(1)」, 言語文化研究, 41, p.109-130 (2015).
- [20] 坂内千里:「『説文解字繫傳』, 「通釋篇」所収の親字について, 「疑義篇」考(2)」, 言語文化研究, 42, p.107-126 (2016).
- [21] 坂内千里:「『説文解字繫傳』, 「疑義篇」考(3), 「通釋篇」中の偏旁について」, 言語文化研究, 43, p.51-75 (2017).
- [22] 坂内千里:「『説文解字繫傳』データベースの構築」, 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書 (2006).
- [23] 蔣門馬: 説文解字綜合検索系統, <http://www.homeinmists.com/shuowen/> (2018年10月閲覧)
- [24] suzuki toshiya: <https://gitlab.com/mpsuzuki/mkHtml.rb/tree/swjz-xz-4qks> (2018年10月閲覧)
- [25] 徐鍇: 説文繫傳 (文淵閣本), <https://archive.org/details/06050623.cn-06050633.cn> (2018年10月閲覧)
- [26] 徐鍇: 説文解字繫傳 (祁寯藻本, 道光19年版影印), 華文書局 (1971).
- [27] 徐鍇: 説文解字繫傳 (祁寯藻本, 小学彙函本), <http://repository.lib.cuhk.edu.hk/en/item/cuhk-769994-771071> (2018年10月閲覧)
- [28] 徐鉉: 説文解字 (摘藻堂本), <https://archive.org/details/06081956.cn-/06081963.cn> (2018年10月閲覧)
- [29] suzuki toshiya: <https://gitlab.com/mpsuzuki/mkHtml.rb/tree/swjz-jiguge-4qcy> (2018年10月閲覧)
- [30] https://twitter.com/CHISE_ja/status/1046034996614520832 また https://twitter.com/CHISE_ja/status/1053308443740712960 (2018年10月閲覧)
- [31] 鈴木俊哉:「四庫全書本『説文解字繫傳』に見える小篆異体字」, 環境科学研究, 投稿中

¹ 『四庫採進書目』には、大徐本は、6本(兩淮商人馬裕家呈送書目)、16本(河南省呈送書目)、10本(武英殿第一次書目)の3種類が見える。これらは四庫提要に言及がない。

² 台湾国家図書館所蔵の朱筠旧藏宋刊殘本(索書号 110.21 00 911)の跋には「説文解字始一終亥者, 自汲古閣摹宋本外, 絶少他本…不及以毛氏本校正」とある。

³ 桂馥『説文解字義証』の巻50に、宋葆淳が所蔵する毛晉および季振宜の印記がある宋刊小字本を見たことが書かれており、五音韻譜と符合することまで認識しているが、逆に汲古閣本が大徐本の姿を残しており、この宋刊本は王子韶が改訂したもので、五音韻譜はここから派生したと疑っている。

<https://archive.org/stream/02076441.cn#page/n116/mode/2>

up (2018年10月閲覧)

⁴ 朱筠の跋文などを集めた『復初齋文集』に、「此本有毛氏印或疑即汲古閣本之所從…訛誤之多指不勝屈則宋時坊間麻沙板本…非毛氏刻本所從出者也」とある。

<https://archive.org/stream/02103400.cn#page/n66/mode/2up> (2018年10月閲覧)

⁵ 述古堂本を所蔵していた錢曾は趙宦光旧蔵の大徐本の宋刊小字本(殘本, 北京大学現蔵)も所蔵していた。錢曾は汲古閣本の出版以前に没したが、『讀書敏求記』の大徐本の項目(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2580049/34>)では『五音韻譜』が広まって本来の大徐本が伝わらなくなったことを「宋人嗜味欲便於檢閱妄以一東二冬依韻分之大失許氏原書之本旨其厄更甚于秦坑焚燎矣」と焚書坑儒に譬えて非常に厳しく批判している。

⁶ 述古堂本は葉心に「虞山錢遵王述古堂藏書」の語が見えるので、錢曾の存命中(1639~1701)に書写されたと思われる。

『讀書敏求記』(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2580049/35>)の小徐本の項目では、底本は何で、どこから入手したという情報はない。この入手経路を記さないことは大徐本でも同様である。

⁷ 四部叢刊の初版(1919~1922)の小徐本は全て述古堂本によるが、重刊(1926~1929)およびそれ以降の版は巻30~40を鉄琴銅劍樓本に差し替えている。現在流通する大半の再影印出版は後者の影印である。小徐本の巻01~29は許慎の著作に徐鍇の解説を加えたもので、巻30~40は徐鍇が新たに書いた部分である。鉄琴銅劍樓本は巻30以降しか残っておらず、許慎の著作に対する変更を最小限にしようとした大徐本とそのまま対比することはできない。ところで、四部叢刊影印の述古堂本には罫線があるが、台湾国家図書館に残る述古堂本(索書號 110.21 00921)には罫線がない。加筆の可能性については注意が必要である。

⁸ 汪啓淑本の問題点を修正しているとの評価もある(たとえば文献[14]など)が、筆者が参照できた版本(東京大学総合図書館, 請求記号: 陽 A30:210, また早稲田大学古典籍 DB, 請求記号: 文庫 01 01521 0070, http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko01/bunko01_01521_0070/index.html)はどちらも出版地不明扱いであり、刷りの状況も良くないため、十分な分析をしていない。今後の課題とした。

⁹ 淮南書局翻刻の四次様本は毛扆の書き込みも部分的に翻刻されているが、そこに癸巳の干支が見えることから、最後の修訂は出版の1713年まで続いていたことがわかる。また、南京図書館に残る三次様本をもとに四次修訂は康熙43年ごろ(1704)と推定する説がある[13]。

¹⁰ 文献[13]のp.45の脚注4を参照。

¹¹ この解釈の最も早く明記されたのは朱文藻の『重刊繫傳考異』(1806)の跋で、「錢塘汪戸曹劬庵、從全書館錄出繫傳…」と書いているものであろう。日本では、古くは倉石武四郎の「清朝小学夜話」に「…汪啓淑が四庫の中の繫傳の稿本を見て…」とする。『説文入門』もこれに「…紀昀の家蔵本が四庫館に入った。その四庫本を汪啓淑が乾隆47年(1782)に刊行しました。」(p.31)とする。近年でも坂内千里氏の『経部引用書から見た「説文解字繫傳」注釈考』は「…四庫全書完成の頃に、たまたま錢塘の汪啓淑がその中の小徐本の稿本を見て、広く世に伝えたいと考え…」(p.12)としている。この解釈は日本に限ったものではなく、中国でも楊洪升氏は汪啓淑本の跋から「汪氏所謂獲見之“稿本”当即館中校定之“四庫”底稿本」とする。国際的にも一般的な理解と言えるだろう。

¹² この差異については東ヶ崎祐一氏よりご教示頂いた。

¹³ 文献[13]のp.44の脚注4を参照。

¹⁴ 台湾国家図書館に翁方綱旧蔵の小徐本の写本が残る(索書號 110.21 00922)。この写本には桂馥、沈心醇の校語も書きこまれている。校語に「己亥」「庚子」などの干支が見えるこ

とから、校語が書きこまれたのは1779~1780年で、汪啓淑本より前と推測される。董氏はこれが汪啓淑本の底本の一つと考えている。

¹⁵ 四庫全書本の底本が提要で明らかになっていない状況があっても、その底本を明らかにしようという研究は、中国では非常に少なく、馮先思「四庫本《玉篇》版本考」(図書館雑誌, 2015年第8期, p.104-107,112)程度しか見つからない。

¹⁶ 『説文繫傳考異』は朱文藻が編んだものであるが、四庫館に入ったものには署名がなく、所蔵していた汪憲の作であると誤解された。のちに編まれた『重刊説文繫傳考異』については広く流布している影印本がないが、筆者は東京大学東洋文化研究所蔵の八杉齋本(請求記号 経;小學:字書:3)を参照した。

¹⁷ この記述をもとに坂内千里氏は「この本は、上述の如く、巻25は欠巻のままで、そこには大徐本が足されており、示部には大徐の新附字まで竄入されており、更に朱文藻の考異により校改され、附録1巻もそのまま採録されている」(『経部引用書から見た「説文解字繫傳」注釈考』, p.12)と書く。ここに書かれた状況に誤りはないのだが、これらを汪啓淑本特有の問題と見るべきではない。現行の小徐本全てで巻25は大徐本をもとにしており、示部に新附字が入っている状況も同様だからである。

¹⁸ 王筠『説文繫傳校録』には「顧本」という呼称が出てくるが、序文で「祁春浦先生刻顧千里本」のように書き、本文でも「祁本」「顧本」の違いを述べているところは見当たらないため、祁寓藻本のみ確認したと思われる。

¹⁹ 董氏によれば、苗夔の道光18~19年の校語が残る汪啓淑本が中国国家図書館に残り、それに苗夔が見た顧廣圻写本の様子が書かれているという(文献[13], p.42)。

²⁰ 錢楚殷本が実際には述古堂本である疑いもあるが、李富孫によれば錢楚殷本の葉心には「虞山錢楚殷藏書」とあり、さらに「來春閣席汾」の印記があったという(文献[13], p.41, 脚注2参照)。これらは述古堂本に無く、また段玉裁、鈕樹玉、顧廣圻らの印記なども見えない。

²¹ 李陽冰の篆書作品に見える字形については周祖謨の研究[18]が詳しい。疑義篇が(字形を具体的に示さずに)述べる李陽冰刊訂本の字形と、木部残巻の比較としては、李家浩「唐寫本《説文解字》木部殘卷爲李陽冰刊訂本考」(文史, 62 (2003), p.209-215)も参照されたい。ただし、この論文では説文字体・石刻篆文の比較に関しては言及がない。

²² 「彳」については、福田氏が文献[17]で指摘するように、実際には甲骨文の頃から石刻篆文のような字形で書かれることが多く、説文字体で書かれている資料は非常に少ない。

²³ 王筠『説文繫傳校録』には若干の言及があるが、各本の状況を個別には整理しておらず、王筠自身がこの書き分けについてどのように理解していたかも明らかではない。

²⁴ 段注本の「言」は全てここでいう説文字体で書いている。また、文献[16]で解説されているように口部断簡もこの字形である。

²⁵ これらが2つとも「月」あるいは「肉」なのではなく、「月」と「肉」の書き分けを示していた可能性も考えられるかもしれない。

²⁶ おそらく、祁寓藻本と述古堂本の各巻冒頭の頁数の対応だけを作り、後続の頁に関しては祁寓藻本の結果を単純に複製したものと思われる。

²⁷ たとえば、ISO/IEC 10646での4000~5000字規模の漢字統合作業を行う場合では、レビュー初期において、ある字形差を有意と見なしていたが、後に同様の事例が多すぎるということがわかり、無視するように変更したものの、初期のレビュー結果が残っていて不整合が起きる、などの事例があった。

²⁸ 国会図書館蔵本のマイクロフィルム(YD-古-2399)の紙焼き画像の公開許可の交渉中である。